

2. 事業の概要と成果

(1) 上位目標の達成度

上位目標

『HIV に対する意識啓発と予防スキル取得によってチェンマイ県の青少年の HIV 感染が減少する』

本事業で HIV エイズ感染予防教育を受けた青少年の人数を以下の表 1 に示す。ピアエドゥケーターを含む教育を受けた学生の総数は 12,467 人であり、高等専門学校の数のおよそ 41%、チェンマイ県の青少年(15 歳～19 才)の人口 105,644 人(2015 年)のおよそ 12% にあたる。それ以上にピアエドゥケーターたちは自らの出身地や現在学んでいる学校周辺のコミュニティあるいは近隣の学校でも HIV 予防教育を実施しているため、本事業で把握している人数よりも多くの青少年が教育を受けていることがインタビューにより判明している。

表 1: 3 年間で事業に参加した学生数 (人)

	1 年目	2 年目	3 年目	合計
ピアエドゥケーター	121	120	110	351
後輩ピアエドゥケーター	120	120	110	350
ピア教育参加者	3,170	1,962	1,834	6,966
特別キャンペーン	1,850	1,850	1,100	4,800
3 年の参加者総計			12,467	

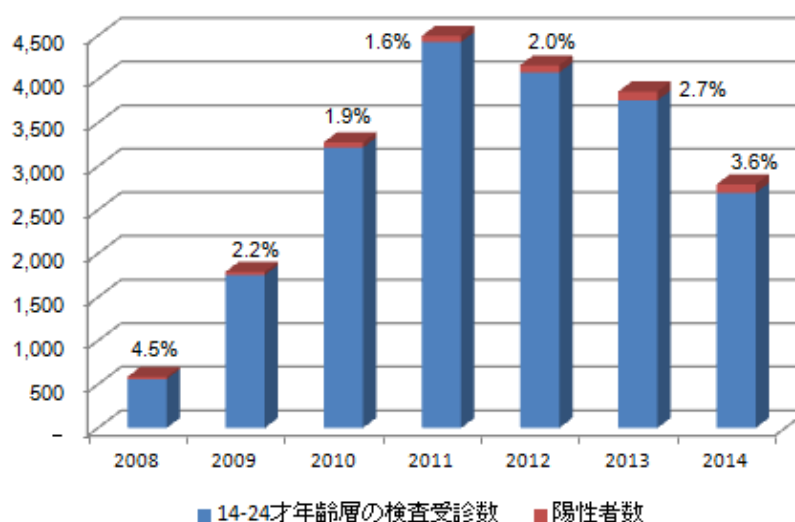
本報告書の「達成された成果」が示すように、HIV 感染を予防する行動をとるようになった学生の割合増加は、今後の HIV 感染の減少を後押しすると考えられる。さらに、参加者あるいはその友人の中でリスク行動を自覚しているものが 3 年間で 507 人 HIV 抗体検査を本事業の支援で受けており、そのうち 4 人が陽性と判明した。陽性者は直後に治療を始めている。

近年の知見では、HIV の 1 次予防が「感染しない」、2 次予防が「陽性者の早期受診・治療」が主流となっている。本事業の対象である 10 代の学生に対して 1 次予防の知識を教育すると共に、陽性者がいるならば、検査で陽性を特定した上で、すぐに抗 HIV 薬投与を始めて、ウィルス増殖を抑えることにより他人への新たな感染を防ぐことが「感染予防」として肝要となってくる。検査受診に対する啓発を行い、陽性者がすぐに投薬治療に入ることを勧めることにより新規感染者数を減らすことができる。

下のグラフ①に示されるように、チェンマイ県では性交渉開始の低年齢化を受けて若年層であっても HIV 検査の受診を強力に進めている。2011 年をピークに受診数そのものは減少傾向にあるが、陽性者発見の割合は徐々に上がっている。つまり、より「リスク・グループ」にターゲットを絞った受診がなされていることを示す。

一方で、事業開始当時、男性同性愛者や売春婦、麻薬中毒者などのリスク・グループ以外の非陽性者の青少年へのアプローチ手段をチェンマイ県保健局は持っていなかった。本事業では、当団体がチェンマイの各高等専門学校に協力を求め、十代の学生を対象に学校ベースで予防教育と HIV 検査受診の促進を行い、チェンマイ県保健局の HIV 対策を推進・普及する役割を果たしたと評価されている。より広い層へのアプローチが可能になったことも、今後のチェンマイ県における感染の減少につながると考えられる。

グラフ①：チェンマイ県青少年の HIV 検査受診数と陽性者の割合



データ出典：チェンマイ保健局（2015年以降の統計なし）

今のところ、HIV/AIDSに関する2015年以降の統計がまだ発行されていないため、当事業によるチェンマイ県における青少年のHIV感染者数の減少については数値では示すことができない。また、実際の感染は検査を受けることによってのみ感染率に反映されるので、10年後、20年後の将来、チェンマイ県の20代・30代の青年層の感染率の増減に介入の効果が表れてくるものと考えられる。

(2) 事業内容

本事業は、タイ、チェンマイ県内全ての高等専門学校（18校）を対象に『高等専門学校生がHIV/AIDSに関する知識を身につけ、予防意識を高め、感染予防のための行動を取る（安全な性行動、コンドームの使用、HIV抗体検査の受診等）』、また『ピアエドゥケーターと高等専門学校の職員がピアエドゥケーター育成とピア教育の手法を身につける』ことを事業目標とした3年事業の最終年3年目にあたる。以下は、2015年8月1日から2016年7月31日までに6校で実施した活動について記載する。事業は計画通り行われた。

- ① 高等専門学校職員への事業説明会：チェンマイ県保健局職員らと共に6つの高等専門学校をそれぞれ訪問し、理事長を含め学校職員に本事業の説明を行い、本事業への理解と協力を得た。

- ② 高等専門学校職員・高等専門学校生代表・チェンマイ県保健局職員・感染症対策室職員への合同事業説明会：関係者 72 名の出席の下、本事業の開会を宣言し、今後の事業の方向性・活動内容などを確認した。
- ③ ベースライン調査：HIV/AIDS の知識や予防行動について調べるため、各学校から 20 人ずつをランダムに選び、合計 120 名の学生を対象に質問票調査を行った。この調査結果をベースラインとし、事業終了時に実施する年度終了時調査の結果と比較し、事業の成果を測った。
- ④ 高等専門学校生ピアエドゥケーター育成研修：HIV/AIDS に関する知識を得たうえで、ピアエドゥケーターに必要なリーダーシップ能力や活動計画書作成能力等が身につくように 2 日間の研修を行った。また、HIV 陽性者からの話を聞く時間を設け、陽性であることへの理解を深めた。6 つの高等専門学校から計 110 名のピアエドゥケーターを始め、チェンマイ県保健局職員、感染症対策室職員、高等専門学校職員、第 1 期と第 2 期のピアエドゥケーター、大学生ピアエドゥケーター等総勢 162 名が参加した。
- ⑤ 高等専門学校の職員を対象にしたカリキュラムや教材作成のための会議開催：第 2 期に作成したカリキュラムや教材を、第 3 期の対象学生（14-19 歳）に合わせ改訂した内容・デザインを確認した。チェンマイ県保健局職員、感染症対策室職員、学校職員ら計 14 名が出席した。
- ⑥ 学校内ネットワーク月例会議と研修後のフォローアップ：当団体職員が毎月各学校を訪問し、高等専門学校ピアエドゥケーターや担当教員と共に活動案やメディア教材作成について議論し、必要なサポートを行った。
- ⑦ ピア教育プログラム企画・メディア開発の発表会：高等専門学校生ピアエドゥケーターが独自のアイディアで企画したピア教育プログラムや、自ら作成したメディアを発表した。HIV 感染予防を訴えるドラマやアニメ作品、マンガ冊子、歌、また学内に設置するコンドーム箱らのアイディアが発表され、県保健局職員や当団体職員がアドバイスをを行った。総勢 46 名が出席した。
- ⑧ ピア教育活動：6 つの高等専門学校で計 18 回のピア教育（計 1,834 名が参加）、計 6 回の特別キャンペーン（計 1,100 名参加）を実施した。ピア教育活動に使う教材やテントなどの設備も寄贈された。
- また、各高等専門学校で 1 回ずつ計 6 回の HIV 抗体検査を実施し、計 211 名（男性 106 名、女性 105 名）が受診した。検査には、州保健局、感染コントロール室、病院などから HIV 検査担当チームが各学校に派遣されて、検査が実施された。各学校で想定以上の人数が集まり、予定されていた 120 名を大幅に上回った。
- ⑨ 各学校に「ピア教育ルーム」を開設：6 つの高等専門学校にピ

	<p>ア教育ルームを開設し、学校職員とピアエデュケーターが中心となり運営できるように支援を行った。</p> <p>⑩ 経験を積んだ高等専門学校生ピアエデュケーターによる後輩ピアエデュケーター育成研修：6つの高等専門学校から計110名の後輩ピアエデュケーターを育成した。参加者である110名の他に、先輩ピア、学校職員、県の保健局担当間を含め43名が参加し育成研修に協力した。当団体による支援がなくなる次年度以降も、後輩ピアエデュケーターと学校職員が中心となり活動を継続していく。</p> <p>⑪ 中間会議、年次評価会議の開催：中間会議（2016年1月開催）では、45人が参加し、各学校のこれまでの活動の成果と課題、今後の計画等を話し合った。年次評価会議（2016年7月開催）では、事業最終年でもあることから、3年目の参加学校だけでなく1年目、2年目の参加学校から先生と学生代表も参加して全44人が参加した。各学校の代表が1年間の活動成果のまとめを発表した後に、1年目、2年目参加学校の職員が事業参加後の経験を共有した。</p> <p>⑫ 成果を測るために終了時に各学校で20名をランダムに抽出し合計120名の学生にサーベイ調査を行った。ベースラインデータと比較して事業前後の変化を調べた。また、ピアエデュケーター12名（各校2名ずつ）を対象にフォーカスグループディスカッションと、チェンマイ県保健局担当官や高等専門学校の職員の計6名を対象に事業に関するインタビューを行った。</p>
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>本事業3年目における全参加学生数は、高等専門学校生ピアエデュケーターが220人（後輩ピアエデュケーター含む）、ピア教育参加者1,834人、特別キャンペーン参加者1,100人で合計3,154人であった。目標であった受益者数2,440人を29%も超えた数となり、各学校で本事業への注目度が高かったことがうかがえる。</p> <p>各高等専門学校にはピア教育ルームが設置され（合計6カ所）、引き続き学生のHIV/AIDS予防教育の場や学校の性教育の教室として使われている。</p> <p>申請書に記載した6つの成果指標の達成度を以下に記す。</p> <p>『指標1. ピア教育に参加した高等専門学校生の予防意識チェックリスト・HIVに関する知識テストの結果が少なくとも70点以上になる』は達成した。それぞれの結果を以下に記す。</p> <p>まず、中間報告にも記したピア教育参加者の事後テストの結果であるが、18回開催したピア教育に参加した1,834名の事前テストの平均点は74点が事後では平均94点に向上した。</p> <p>また、事業前と終了時に学生120名を対象に「HIVに関する知識と</p>

「予防意識」を測るアンケート調査を実施した。120名のうち98名がピア教育に参加し、22名は参加していなかった。「ベースライン・グループ」「ピア教育受講者」「ピア教育非受講者」の3グループの結果を比較した表が以下の表2である。

表2：HIVに関する予防意識チェックリスト・知識テスト結果

	事前	終了時	
	ベースライン (n=120名)	ピア教育 受講者 (n=98名)	ピア教育 非受講者 (n=22名)
70点以上を獲得した	79%	100%	95%
平均点	77点	98点	76点

ピア教育参加者の予防意識・知識テストは平均点が大幅にあがり、98人全員（100%）が70点以上を獲得した。ピア教育を受けていない学生も、平均点はわずかに下がっていたものの、70点を超す点数を獲得した人数が大幅に増えた。

事業開始直後の平均点がすでに70点以上であった理由として、今期支援した学校は、過去に地域の病院がHIV予防教育を開催したことがあるなど、所属学生が何らかの教育を受けたことがあったことが要因として考えられる。ある程度、基本的な知識をもっていた学生たちが、当事業によって強化され、より正しい知識を身につけることができた。

『指標2. ピア教育に参加した高等専門学校生のうち、直近の性交渉においてHIV感染を予防するための行動（安全な性交渉のための話し合いをする・コンドーム使用）をとる割合が事業実施前より15%増える』は達成した。

「HIV感染を予防するための行動」として、以下の3点を定義した。

1. 性交渉のパートナーの数を限定した。
2. 直近の性交渉時にコンドームの使用について話し合った。
3. 直近の性交渉時に実際にコンドームを使用した。

表3は表2のアンケート参加者のうち過去半年の間に性交渉があった学生の回答をまとめたものである。それぞれの予防行動を取った割合を比較したところ、ピア教育受講者はベースラインと比較して予防行動をとった学生が15%を上回り大幅に増えている（それぞれ27%、39%、46%）。一方で、非受講者はベースラインとそれほど変わらないことが分かる。

表 3 : HIV 感染を予防するための行動を取った学生の割合 (事前と終了時のアンケート調査より)

	ベースライン (n=52 名)	ピア教育 受講者 (n=33 名)	ピア教育 非受講者 (n=5 名)
性交渉のパートナーの数を 限定した	67%	94%	60%
直近の性交渉時にコンドーム の使用について話し合った	58%	97%	60%
直近の性交渉時に実際に コンドームを使用した	54%	100%	60%

『指標 3. ピア教育に参加した高等専門学校生のうち、HIV 抗体検査を受診したと答える人の割合が事業実施前より 10%増える』は以下の通り達成した。

表 4 : HIV 抗体検査受診の有無に関するアンケート調査結果

	ベースライン (n=52 名)	ピア教育 受講者 (n=33 名)	ピア教育 非受講者 (n=5 名)
HIV 抗体検査を受診した	15%	73%	60%

指標 2 と同様に実施したアンケート調査の結果を表 4 に記す。ピア教育を受けた学生のうち 73 %が HIV 抗体検査を受診したと答えた。ベースラインよりも 58%増加した。ピア教育を受けていない学生も 60%が検査を受けており、ピア教育を受けた学生が検査に誘ったり、情報共有したものと思われる。全員、本事業の出張抗体検査で検査を受けている。

今期支援した簡易検査を受けた 211 名のうち 1 名の HIV 感染が判明した。確認検査を受けた後、その陽性者は治療を始めている。

『指標 4. 高等専門学校生ピアエデュケーターの HIV/STI 知識テスト (目標値 : 9 割の学生が 90 点以上)、リーダーシップ能力とライフスキルのチェックリスト結果 (目標値 : 70 点以上) が事業開始前より向上し、ピア教育を企画・実施できる (目標値 : 最終ピア教育が 100%学生のみで自立して実施し、かつ 100%の学校のピアエデュケーターが次年度のチェンマイ保健局に対する予算申請書を作成する)』を以下の通り達成した。

HIV/STI 知識テスト

高等専門学校生ピアエデュケーターが終了時に受けたテストの成績は、全員が 90 点以上、平均 99 点という結果であり、目標を達成した。

リーダーシップ能力とライフスキルのチェックリスト

本事業ではチェックリストを使い、ピア教育時の教員や当団体職員の観察によってリーダーシップ能力とライフスキルをチェックしている。リーダーシップ能力とは人前で話すスキルやチーム作り、効果的に議論や活動に参加者を巻き込むスキルなどを指す。ライフスキルとは意思決定、適切なコミュニケーション、問題解決、情報分析力などを指す。70点以上とは、上記各スキルを4段階評価(1. Cause for concern, 2. Need improve, 3. Good, 4. Very good)したうち Good 以上を取っていることを表す。

チェックの結果、全員が70点以上の結果を示した。また、セルフチェックでも100%のピアエドゥケーターが90%以上の項目で自信を持っているという結果となった。各回のチェックの後に当団体職員と教員で、きめ細かく学生のスキルに対してフォローアップを行い、ピア教育の回を重ねるごとに上達できるように学生を指導したため、全員がリーダーシップ能力とライフスキルを向上させることができた。

ピアエドゥケーター対象のフォーカスグループディスカッションでは、自信がついたので以前よりも活動に対して積極的に関わられるようになったと自分の変化について述べている。教員も学生たちが責任を持った大人として成長したと評価している。

ピア教育の企画・実施能力

最後のピア教育の企画と実施を学生のみで行った。ピア教育の構成を考え、効果的な教育を行ったことを当団体職員と学校職員が確認した。

『指標 5. 高等専門学校職員が70%以上の活動に参加し、ピア教育手法の知識と実施支援スキルを身につける』は以下の通り達成された。

各々の活動で高等専門学校職員が積極的に参加しており、100%の参加を達成している。本事業の事業目標が、そもそも各高等専門学校で必要とされ、取り組みたい課題であったため、教員全員が目的意識を持って取り組む事ができた。達成の背景として、校長のサポートが厚く、学校としての協力体制があったことがあげられる。

また、ピア教育が非常に効果的で学生の成長が著しかったため、学校職員の関心も非常に高かった。課外活動であっても活動に参加し、学生をサポートした学校職員も大勢いた。

『指標 6. 学生の感染予防行動をサポートする学生間と関係者間とのネットワークが構築され、高等専門学校の担当職員が一校につき一人、すべてのネットワーク会議に参加する』は以下の通り達成さ

	<p>れた。</p> <p>ピアエドゥケーターは、全員が HIV/AIDS にかかわる県保健局の担当官やクリニック職員などの連絡先リストを持っており、そのうちの 108 名 (98%) が事業期間中に性の悩みを相談した友人たちに、専門知識を持っているクリニック職員に相談するように勧めた。ピアエドゥケーター同士は、SNS でつながっており、お互いの情報交換を行い、PHJ が運営するわけではない独自のネットワークを築いている。</p> <p>各学校の担当職員は少なくとも 1 名が全てのネットワーク会議に参加している記録が残っている。学校職員同士も SNS でのつながりを築いており、情報交換や協力関係の構築に努めている。</p>
(4) 持続発展性	<p>3 年事業の最終年度であるため、持続発展性の確認は非常に重要と考え、関係者へのインタビューを行った。各インタビュー結果のまとめと本事業の持続発展性について以下に述べる。</p> <p>① チェンマイ県保健局</p> <p>保健局は、本事業で育成されたピアエドゥケーターたちを、チェンマイ県の青少年のリーダーとして HIV/AIDS 予防だけでなく、今後は麻薬・アルコール・タバコなど青少年が直面するリスクへの対策やリプロダクティブヘルスの推進なども担うリーダーとして認識している。実際に、2015 年より Power Youth in Chiang Mai というグループとして、ピアエドゥケーターたちが保健推進イベントの運営にかかわり活躍している。</p> <p>チェンマイ県保健局はこれまで教育セクターとの協力関係がなく、学生たちへの保健対策は必要であったにも関わらず、対策ができていなかった。本事業のおかげで学校職員との協力関係ができたので、活動への参加を呼びかけることが容易になった。また、本事業で制作されたビデオや出版物などは、今後、普通科の高校や中学校での教育にも使っていく予定である。</p> <p>② 高等専門学校</p> <p>学校のポリシーとして HIV/AIDS 予防を学生に教えることは非常に重要であるとの認識から、各学校の校長や担当職員が高いオーナーシップを持って活動に取り組んだ。本事業に参加する利点として学校側が挙げたのは、当団体スタッフのおかげで、HIV/AIDS 対策を担当する保健局や感染症対策室とのつながりが生まれたことである。また、地域の病院との関係も強化され、本事業をきっかけとして青少年クリニックが設立された地域もあり、地域ごとの自発的な取り組みにつながっている。</p> <p>ピア教育ルームは、各学校での HIV/AIDS 予防対策のシンボルであ</p>

り、拠点であるという認識を持つ学校がほとんどであった。今後もピア教育ルームでのピアエドゥケーターの活動が継続されることとなっている。各学校では来年からの学生の活動をサポートするための予算を確保し、あるいは学生の活動を学校の年度計画に組み込んでいる。

また、インタビューより、本事業への参加をきっかけにして、学校での性教育の授業を始めたという学校が多いことが分かった。担当職員も HIV 感染が学生の人生を左右する健康問題として予防教育をサポートし、性に関する相談に応じており、意識が非常に高い。各学校は、当団体より学んだノウハウを生かして今後も学生にとって必要な活動を自らサポートして続けていくことを約束した。

2年目の対象校で、担当職員が退職で交替したことがあった。それでも別の職員への引き継ぎが行われ、当初の職員と同様に学生の活動をサポートしていることが報告された。

以上により、本事業の現地移行は完了し、各学校で HIV 予防教育活動が引き続き行われることが期待される。